
EXCLAMATION

シェイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

EXCLAMATION

【Nコード】

N1258B

【作者名】

シェイド

【あらすじ】

全ては決められていた。練られた計画の上に立たされた人間たち。学校内で起きた事件の真相とは？初ミステリー作品！

ブローグ

暗く、湿った部屋。机が規則正しく並び、学校の教室に一人、誰かがポツンと立っている。

その”誰か”は口の端を吊り上げ、目に狂喜を浮かばせながら笑っていた。

「くくく、よし、これでいい。ふふ、やっと、やっと復讐が果たされる。神の化身の手によって……」

西暦2025年、コンピュータの発達は著しく、進化に進化を重ね、コンピュータで世の中の殆どが進められるまでになっていた。

その流れに沿って、最新の科学を詰め込んだ、世界初の「all automatic school」通称、AASが誕生した。

6月12日、午前8時22分。

「……ふう」

AASの高等部二年二組の最後方、窓際の席。
居眠りをするには絶好の位置に陣取る、間宮マミヤ
泰斗が一冊の本を
読み終え、憂鬱そうにため息を漏らした。

そのため息の直後、手を顎に添え、落胆の声色でぼそぼそと独り言を始めた。

「やはり、あのトリックを使ったか。この作者には期待していたんだが、もう読む必要も無さそうだな」

「どうやら、先程読み終えたのは、ミステリー小説だったようだ。しかも作者は今、売り出し中の人気作家だ。」

泰斗は声色を変えずに続ける。

「まったく、最近の作家はオリジナリティがないな。ありきたりなトリックをわざとらしく使うばかりじゃないか。先人を見習って新しいトリック考えればいいのに」

段々と声のボルテージを上げながら、独り言はエスカレートしていく。

「そもそもミステリーとは」

そして、いよいよ大題に入ろうかというとき、泰斗にとっては驚きの声が聞こえてきた。

泰斗の正面の席にいたショートヘアの女の子が突然振り向き、

「そのアンタ、うるさいわよ！ 何、一人でぶつぶつ言ってるのよ！」

泰斗に向かってあらんばかりの音量で怒声を浴びせかけた。

怒髪天を衝く、といったところだろうか。

「えっと、俺？」

泰斗は限りなく不思議そうにしているが、他のクラスメイトからすれば、

「やっと言ってくれたか」

ぐらいのことである。

まあ、読み終える度に一人でごちゃごちゃ言っているのだから当然といえば当然なのだが。

「あんたよ、あんた！ いい加減にしなさいよ！」
女の子は溜まった怒りを吐き出すように、物凄い剣幕でまくしたてた。

「……………ああ、ごめん。次から気を付けるよ。ところで君、名前
は？」

数秒の間を開けて女の子を見据えるようにし、優しい声でそう言
った。

「え？ 姫島 ^{キシマ} 瑠美 ^{ルミ} だけど」

今度は瑠美が驚いた顔をし、驚いた声で返した。まさか、いきな
り名前を聞かれるとは思っていなかったようだ。

「……………ふうん」

泰斗は目を細め、薄く笑みを浮かべた。

「何よ」

「いや、何でもない。君は本とか読まないの？」

「読むけど」

瑠美は、つつけんどんに質問に答えていく。

「ミステリーは？」

「たまに読むわよ、それが何！」

「そ、ありがと。参考になったよ」

瑠美の怒りにびくともせず、泰斗はニッコリと笑って、一方的な

質問を一方的に終わらせた。

「あ、気にしないでいいよ、大したことじゃないから。それより、もうチャイムが鳴っちゃうよ?」

未だ優しい声で喋る泰斗のその言葉に瑠美が時計を見ようと振り返った瞬間、聞き慣れたチャイムが学校中に響き渡った。

「ま、お話なら昼休みにでもしようよ」

そう言って、泰斗は濁りのない笑顔を見せた。

「……ふん、もういいわよ!」

瑠美はプイッとそっぽを向き、荒々しく席に着いた。

昼休み

時計の針が頂点にて重なる時、正午。

昼休みを告げる機械的なチャイムが鳴り響く中、泰斗は辺りをゆつくりと見回した。

「……いない、な」

チャイムの余韻がまだ残っているにも関わらず、瑠美の姿は無かった。

酷く狭い空。この学校には第二校舎のみ、昼食を青空の元で食べられるようにと、屋上が開放されている。

「ふう、やっと見つけた」

校舎中走り回って汗だくの泰斗が瑠美を見つけたのは、普段、生徒が全く寄り付かないその屋上だった。

「何よ、こんなとこまで来て」

膝の上にちょこんと乗せたお弁当箱を頼張りつつ、瑠美は体を泰斗から背けた。

「えっと、とりあえず、隣、いい？」

「駄目」

0.02秒。これ以上ないまでの即答だった。

「もう、瑠美ちゃんのケチ」

仕方なく泰斗はその場にしゃがみ込んだ。

「名前で呼ばないで、殴るわよ」

相変わらずそっぽを向いたままで、瑠美はとんでもない殺気を放った。もし次に言ったら、果たして殴られるだけで済むのだろうか。

「で、そろそろ隣いいかな」

泰斗は懲りずに立ち向かう。

「向こうに座ればいいでしょ」

瑠美は数多いベンチの中から、一番遠いベンチを指差した。

「……ここでいいです」

足元のゴミを退かしながら、泰斗は三角座りをした。埃も多く、生徒が近寄らないだけに掃除も行き届いていないようだ。

しばらく無言が続いた後、瑠美が話を切り出した。

「ねえ、あんた、お昼は？」

「ああ、俺はあんまり食べないんだよ」

泰斗は大きいゴミをまとめて傍にあったゴミ箱に捨てだした。意外と綺麗好きなようだ。

「ふうん、ま、どうでもいいけど」

そう言って瑠美は立ち上がり、お弁当箱片手に扉へと歩きだした。

「え、もう戻るの？」

瑠美に続いて立ち上がり、泰斗は情けない声を漏らした。

「当たり前でしょ。……あれ、開かない」

瑠美はドアノブを握ったが、その扉は固く閉ざされていた。

「え、どうしたんだよ」

様子がおかしいのを感じ、焦って瑠美に駆け寄る。

「開かない、開かないよ！」

一度、二度三度、ノブを捻るが、扉はビクともしない。

「あんた、何かしたんじゃないでしょうね！」

瑠美は泰斗に疑いの目を向けるが、それが不可能だということは解っていた。

この学校、AASは扉はおろか、窓やロッカーまでコンピュータ制御に頼っている、故に一個人、それも生徒一人でいじれるものではない。

「落ち着きなよ。そんなの、無理に決まってるだろ」

泰斗は踵を返し、先程まで瑠美が座っていたベンチに腰を下ろした。

「とりあえず、ここで待とう。きっと誰かが気付いてくれるさ」

「……うん」

瑠美の瞳には涙が浮かんでいた。無理もない、二人は閉じ込められたのだ、青空の下に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1258b/>

EXCLAMATION

2010年10月9日07時42分発行